様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２４１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７８０３４６

研究課題名（和文）中高年者の自己複雑性；社会関係が主観的well-beingに与える影響の調整効果

研究課題名（英文）Self-complexity for middle aged and older: A moderation effect of self-complexity on the association between social relationships and subjective well-being.

研究代表者
中原　純（NAKAHARA, Jun）

聖学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：２０５４７００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では活動理論に自己複雑性（SC）の概念を導入した因果モデル「就労者アイデンティティを取り上げるがポジティブ感情に及ぼす影響を自己複雑性が調整する」を、実証的に検討した。調査会社A社の50～74歳で、何らかの就労を行っているモニター348名（Mage = 60.23, SDage = 6.32, 男性203名, 女性145名）に対し、質問紙調査を実施した。分析の結果、肯定的自己複雑性の調整効果が検証され、肯定的自己複雑性が高い人は、就労者アイデンティティとポジティブ感情の結びつきが強かった。一方で、否定的自己複雑性の調整効果は検証されなかった。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to test the causal hypothesis, based on activity theory of aging and self-complexity (SC), that SC moderates the relationship between worker identity and positive affect. For this purpose, a mail survey was conducted among 348 middle aged and older persons (Mage = 60.23, SDage = 6.32, 203 males, 145 females). The results from regression analysis showed the hypothesized moderation effect of positive SC was significant, but the one of negative SC was not significant. In sum, for middle aged and older persons who had higher positive SC, their worker identity were more strongly associated with positive affect.

研究分野：社会心理学

キーワード：自己複雑性　中高年者　主観的well-being　役割アイデンティティ

１．研究開始当初の背景

高齢者の社会関係が豊かであることが主観的 well-being（SWB）と関連することは既に膨大な実証研究（Larson, 1978; Pinquart & Sorensen, 2000）より明らかにされ、その因果関係のメカニズムは老年学の伝統理論である活動理論（activity theory of aging; AT; Lemon et al., 1972; 古谷野, 1984）により説明されている。AT では、高齢期における役割喪失が少なければ、その人が参加する活動は多くなり（公準 1)、活動度が大きければ、その人はより多くの役割支持を得ることができ（公準 2)、役割支持が多いほど、その人はより肯定的な自己概念を持ち（公準 3)、肯定的な自己概念が強いほど、その人の生活満足度が高い（公準 4）という 4 つの公準で構成される。実証的にも、肯定的自己概念としての役割アイデンティティ（RI; 役割支持によって変動する個別領域の自己概念; 配偶者アイデンティティ、祖父母アイデンティティ、就労者アイデンティティなど）は SWB を良好にすることが示されてきた（中原, 2014; Reitzes & Mutran, 2002; 2004)。

一方で、AT のみに依拠した場合、個別の役割がWBに与える独立した影響は考慮することができるが、個人の持つ複数の役割間の相互作用が検討できないという重要な問題点が残される。すなわち、1 人の高齢者が夫であり、親であり、祖父母であり、ボランティアでもある場合、それぞれの役割に関する行為を行うことが独立して（あるいは相互に影響し合って）SWB の向上（あるいは低下）に繋がるかどうかは AT のみでは説明できない。

そこで、臨床心理学や社会心理学の領域で扱われてきた自己複雑性（self-complexity; SC; Linville, 1985; 1987）という概念を導入し､AT では説明しきれない SWB に対する役割間の相互作用を検討する。SC とは、自己概念が多くの側面に分かれており、その側面間が明確に分離・独立している様態のことであり（Linville, 1985; 1987)、役割の多さと各役割の分化度の高さが SC の高さであると定義されている。また、多様な役割に従事することは、多面性を表す SC を高めるため、自己のある領域でのネガティブな事象の影響が自己全体に波及することを防止する（Linville, 1987）とされる。現在では、ネガティブな事象が生起したときに、出来事の衝撃を緩衝する肯定的自己複雑性（P-SC）と衝撃を促進する否定的自己複雑性（N-SC）が見いだされている（Woolfolk et al., 1995)。

加えて、P-SC や N-SC の文脈において、SC の指標として算出されてきた統計量「H」（方法にて後述）は、自己概念の精緻化の程度を示す指標であるとされる（佐藤, 1999)。すなわち、P-SC が高ければネガティブな事象に対してポジティブな自己関連情報を想起しやすく、SWB への波及を緩衝するが、N-SC が高ければネガティブな自己関連情報を想起しやすく、SWB への波及を促進してしまうということである。

２．研究の目的

以上の議論を踏まえ、本研究では AT に自己複雑性（SC）の概念を導入した因果モデルを構築し、実証的に検証する。自己複雑性因果モデルの骨子（仮説）は、「役割アイデンティティ（本研究では、就労者アイデンティティを取り上げる）が SWB（本研究ではポジティブ感情を取り上げる）に及ぼす影響を P-SC および N-SC が調整する」である。

３．研究の方法

(1) 調査対象者および調査内容

調査会社 A 社の 50～74 歳で、何らかの就労を行っているモニター348 名（M_{age} = 60.23, SD_{age} = 6.32, 男性 203 名, 女性 145 名）に対し、質問紙調査を実施した。調査時期は 2016 年 2 月～3 月であった。調査内容は、1) 自己複雑性(Linville‘s H を算出するために川人（2015）が実施した方法を利用した。対象者は自己の重要な側面について、できる限り多くを記入欄に記入する。その後、各側面に当てはまる特徴を特性形容詞リストから選び、形容詞欄に記入することを求める。なお、形容詞は佐藤（1999）によって収集された 40 項目を使用する（“活動的”、“融通がきく”などのポジティブな形容詞 20 項目、“きどりや”、“残酷”などのネガティブな形容詞 20 項目)。分析は肯定的自己複雑性(P-SC)および否定的自己複雑性(N-SC)を算出し、使用した。)、2) 就労者アイデンティティ尺度(中原, 2014, α = .92)、3) 感情的 well-being 尺度(中原, 2011)よりポジティブ感情に関する 3 項目（α = .84)、および 4) 統制変数に関する項目(性別、年齢、主観的健康状態、主観的経済状況、居住形態、友人の数、最終学歴、就労頻度)であった。

⑵ 倫理的配慮

聖学院大学研究倫理委員会の承認を得た後、対象者には文章により、研究の趣旨や倫理的配慮について伝えた後に実施した。

⑶ 分析方法

就労者アイデンティティ（WI）のポジティブ感情への影響に対する P-SC および N-SC の調整効果を検討するために、統制変数に加え、それぞれの主効果および交互作用項(WI×P-SC、WI×N-SC)を独立変数として含む重回帰分析を実施した。

４．研究成果

⑴ 対象者の基本属性と記述統計量

Table 1 に基本属性および各指標の記述統計量を示した。大学生を対象とする先行研究と比較すると、中高年者は P-SC や N-SC が低くなる傾向が示された。

Table 1　各指標の記述統計量

	平均値	SD
主観的健康状態	3.70	0.89
主観的経済状況	2.85	0.95
友人の数	5.91	6.69
就労頻度	5.39	1.08
就労者アイデンティティ	36.32	7.05
肯定的自己複雑性	1.66	0.89
否定的自己複雑性	1.50	0.84
ポジティブ感情	8.89	2.76

また、居住形態は、家族と同居している人が 319 名（91.7%）、一人暮らしの人が 29 人（8.3%）、最終学歴は、高等学校卒業以下が 168 名（48.3%）、専門学校・大学卒業以上が 180 名（51.7%）であった。

(2) 仮説の検証

ポジティブ感情を従属変数とする重回帰分析の結果、WI(β = .330, p＜.01)および WI×PSC の交互作用項(β = .124, p＜.01)とポジティブ感情の関連がみられた（Table 2）。そこで、単純傾斜分析を実施したところ、PSC が高い場合(+1SD)および低い場合(-1SD)のいずれも単純傾斜は有意であったが(順に、β = .445, p ＜.01, β = .214, p＜.01)、PSC が高い場合の傾きがより大きい傾向がみられた（Figure 1）。

Table 2　P-SCの調整効果

	標準化偏回帰係数	
	model 2_{PSC}	model 3_{PSC}
WI	.326 **	.330 **
PSC	.062	.066
WI × PSC		.124 **
R^2値変化量	.093 **	.015 **
R^2値	.319 **	.334 **

Note. Model 1 は、統制変数のみを独立変数として投入したものである。**p < .01

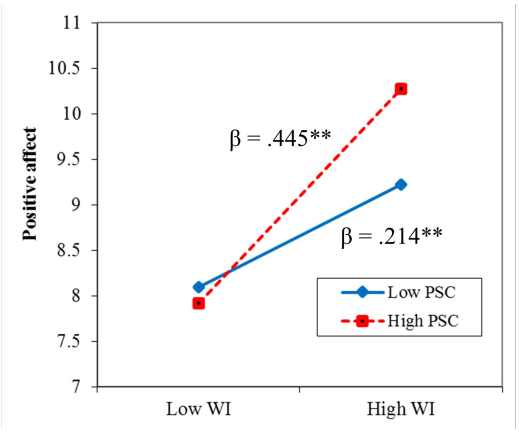

Figure 1. 単純傾斜分析結果

一方で、WI×NSC の交互作用項(β = .082, ns)とポジティブ感情の関連はみられなかった（Table 3）。分析の結果は、多様な役割関係のポジティブな側面が精緻化されていることを表す P-SC が高く形成されている人は、就労者アイデンティティとポジティブ感情の関連が強いことが示されている。つまり、単一の自己の側面である役割アイデンティティが SWB に与える影響を最大限引き出すためには、P-SC が高いことが重要であると考えられる。

Table 3　N-SCの調整効果

	標準化偏回帰係数	
	model 2_{NSC}	model 3_{NSC}
WI	.333 **	.327 **
NSC	-.005	-.004
WI × NSC		.082
R^2値変化量	.090 **	.007
R^2値	.315 **	.322 **

Note. Model 1 は、統制変数のみを独立変数として投入したものである。**p < .01

(3) まとめと今後の課題

自己の 1 つの側面である役割アイデンティティをポジティブに形成することは高齢者の SWB にとって重要であると共に、肯定的自己複雑性が良好であることで、役割アイデンティティの SWB への影響を強めることが示された。高齢者の SWB の向上を目指すならば、今後は川人（2015）が開発した大学生用の自己複雑性介入プログラムを高齢者に適用し、高齢者の肯定的自己複雑性を高めることが重要であると考えられる。

(4) 主要引用文献

① 中原純 シルバー人材センターにおける活動が生活満足度に与える影響－活動理論（activity theory of aging）の検証－ 社会心理学研究, 29, 180-186, 2014.

② 中原純 感情的 well-being 尺度の因子構造の検討および短縮版の作成 老年社会科学, 32, 434-441, 2011.

③ Woolfolk, R. L., Gara, M. A., Ambrose, T. K., Williams, J. E., Allen, L. A., Irvin, S. L., & Beaver, J. D. Self-complexity, self-evaluation, and depression: An examination of form and content within the self-schema. Journal of Personality and Social Psychology, 68, 1108-1120, 1995.

④ Linville, P. W. Self-complexity as cognitive buffer against stress-related illness and depression. Journal of

Personality and Social Psychology, 52, 663-676, 1987.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計６件）

① **中原純・水上喜美子・菅原育子・村山陽・小林江理香・岩淵千明 超高齢社会における社会心理学の役割（２）～高齢者を対象とする調査研究からの貢献～　日本社会心理学会第 57 回大会（兵庫）　ワークショップ**, 2016 年 9 月 17 日.

② Nakahara, J. A public temporary employment agency promotes positive worker identity and life satisfaction in Japanese elderly people: a longitudinal test of Lemon's activity theory of aging. The 31th International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 25 July, 2016.

③ **中原純・水上喜美子・田渕恵・石盛真徳・唐澤真弓・菅原育子 超高齢社会における社会心理学の役割（1）　日本社会心理学会第 56 回大会（東京）　ワークショップ**, 2015 年 11 月 1 日.

④ Toyoshima, A., Sato, S., & Nakahara, J. Does social support from older parents toward their children boost parental identities ?: A Longitudinal Investigation. The 16th SPSP annual meeting. Long Beach, California, 28 Feb, 2015.

⑤ Nakahara, J. & Yasuda, S. Self-motivated work promotes positive worker identity and life satisfaction in the elderly. The 16th SPSP annual meeting. Long Beach, California, 26 Feb, 2015.

⑥ Nakahara, J., Karasawa, M., & Ryff, C. D. Do Social Relationships Mediate Relationships between Age and Positive Emotion?: A Test of Socio-emotional Selectivity Theory in Japan and the U.S. GSA's (Gerontological Society of America) 67th Annual Scientific Meeting, Washington, DC, 6 Nov, 2014.

〔図書〕（計１件）

① **中原純** (2016). **活動理論と離脱理論 佐藤眞一・権藤恭之(編) よくわかる高齢者心理学 ミネルヴァ書房**, pp.24-25.

〔その他〕
ホームページ等：
http://researchmap.jp/read0148442
https://sites.google.com/site/nakaharajun0417/home

６．研究組織
(1)**研究代表者**
中原　純（NAKAHARA, Jun）
聖学院大学・人間福祉学部・准教授
研究者番号：20547004